



CeMI 気象防災支援・研究センター News Letter

Contents

1. 迷走台風
2. 雷の危険
3. お天気よもやま話 ~避難行動について

1 迷走台風

盛夏期に複雑な動きをする台風を「迷走台風」と言ったりしますが、気象庁では「複雑な動きをする台風」と呼んでいます。台風自らが迷走しているわけではないということのようです。

台風は自らの力で移動する力はない（わずかに北北西に動く力はある）ので、周りの風によって動かされています。「風の吹くまま」ですね。また、「台風は、太平洋高気圧の周辺部の風に流される。」というような説明もされることがありますが、それはこのことを言っているものです。

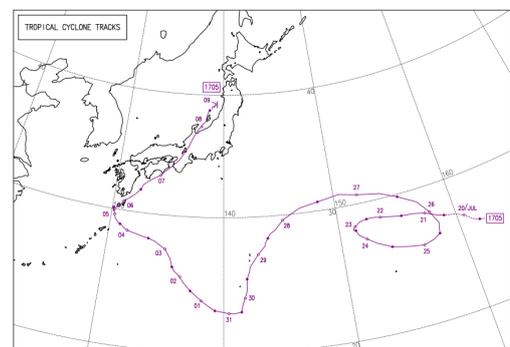
さて、盛夏期にはジェット気流も日本付近には無く、日本から太平洋域を太平洋高気圧が広く覆うことが多くなりますので、台風が発生しても太平洋高気圧の周辺部とならないこともあります。このような状況になると、台風を動かす風が弱かったり、定まらなかったりして、停滞や複雑な動きをすることになります。

また、盛夏期は台風が沢山発生する時期ですので、台風が複数個あり、比較的近い位置にあることがあります。その際、互い影響しあって複雑な動きをすることがあり、その現象を「藤原の効果」と言います。

2017年の台風第5号は、台風として最も長寿の台風です。7月20日21時に発生して、8月8日21時に熱帯低気圧にな

るまで、実に19日間の長寿命となりました。下図は台風第5号の経路図です。風の弱い海域を進みループした後、他の台風の影響（藤原の効果）で南下したりUターンしたりしました。最後には本州に上陸しています。途中で、非常に強い勢力にも発達して、かつ動きも遅かったため、記録的な大雨となったところもありました。

この台風第5号の様に、盛夏期は「複雑な動きをする台風」が多く発生します。また、動きが遅いことも多く勢力が弱くても大雨となることがありますので、「雨台風」などと表現することもあります。気象庁の台風の進路や大雨の予想も年々精度が向上していますので、いずれにしても気象情報に基づいて対応することが大切です。



2017年台風第5号の経路図(出典:気象庁HP)



2 雷の危険



『夕立や ひとかたまりの 雲の下』という正岡子規の有名な俳句があります。夏、発達した積乱雲の下で降る夕立を詠んだものですが、夕立も激しい雷〔落雷〕を伴うことがあります。他の気象災害に比べると大きな話題になることは少ないものの、人命に関わるような災害につながる可能性があります。8月は雷の多い時期でもあり、十分な注意が必要です。落雷による被害は人畜に直接的な害をもたらすことのほか、建物への落雷では火災を引き起こすことがあります。また、近年では落雷により電子機器等が被害を受けて、工場の生産ラインや様々なデータの処理等に影響を与えることもあります。

1967〔昭和42〕年8月1日、長野県の松本深志高校の2年生50名と先生5名のパーティーが西穂高岳の稜線上で落雷に遭い11名が死亡、12名が重軽傷を負う大きな事故が起こりました。また、1987〔昭和62〕年8月5日朝、高知県東洋町の生見海岸に落雷があり、サーフィンをしていた6名が死亡、6名が重軽傷を負いました。落雷は広い運動場や公園、大きな樹木の下などが危険とされていますが、登山中や海岸での落雷事故も頻繁に起こっています。正式

な統計はありませんが、日本では毎年20人前後が落雷により命を落としていると言われています。

雷の危険な点は雷を起こす積乱雲の発達が早く、一般的には発達を始めて10分から20分程度で落雷につながります。落雷事故の際に「いきなり雷が落ちた」「あまり危険な兆候はなかった」といったことを耳にしますが、戸外での活動中に逃げ遅れるのは短時間に状況が悪化するためです。また、落雷は午後とは限りません。朝から昼前に起こることも珍しくはなく、そのことも頭に入れておかなければなりません。

普段目にする地上の天気図だけでは雷の発生を予測することは困難です。近年は気象の予測技術が向上したため、雷の発生もある程度予測が可能になってきました。気象庁のHPの“雨雲の動き”の中では、雷の活動度を1から4までの4つの段階に分けて10分ごとに最新の状況を確認することができます。登山や戸外でのレジャー、活動の際には常に雷の可能性を考え、空の状況の変化に注意するとともに、気象庁のHPを活用して安全に努めてください。

3 お天気よもやま話 ～避難行動について

避難行動（避難の仕方）という「垂直避難」と「水平避難」が有名ですね。避難情報の発令基準等を検討する際に参考とすべき事項をまとめた「避難情報に関するガイドライン（内閣府）」では、避難行動を3つに分類・整理しています。ひとつ目は、危険なところにいる人が、そこから離れたところに避難する「立退き避難」。これが「水平避難」とも言われているものですね。一方、「垂直避難」は、「屋内安全確保」と「緊急安全確保」のふたつの避難の仕方に整理しています。

「屋内安全確保」は、計画的に自宅等に留まり安全を確保する避難行動です。「計画的に」ここが大事。つまり、なんとなくではなく、自宅がどこまで水に浸かってしまうか？等をしっかり把握したうえで、確信をもって選ぶ避難の仕方なのです。ただし、土砂災害や津波の災害リスクのある区域にいる方は選ぶことはできません。「立退き避難」をしてください。洪水や高潮等の浸水リスクのある区域にいる方で、次の3条件全てがそろう場合は「屋内安全確保」を選ぶことができます。

- ①家屋倒壊等氾濫想定区域（洪水により家屋が倒壊または崩落してしまうおそれの高い区域）に入っていない
- ②浸水深より居室が高い（水に浸からない居場所がある）
- ③浸水しても水がひくまで我慢でき、水・食糧などの備えが十分にある

③を確かめるには水がひくまでの時間（浸水継続時間）の確認が必要ですが、ハザードマップに記載がない場合があります。その際は、お住まいの市町村へお問合せください。

さて、もうひとつの「垂直避難」が「緊急安全確保」です。「屋内安全確保」と名前は似てますが、全く違う避難の仕方です。「緊急安全確保」は、命の危険から身の安全を可能な限り確保するための行動で、災害がすでに発生・または切迫している状況で避難し遅れた場合にとる“次善の”行動です。そのような危険な状況になってしまう前に、情報を活用して早めに避難することが何より大切です。



緊急安全確保イメージ
(出典：内閣府HP)



掲載内容へのご意見、そのほかサービスに関するご相談・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡ください。

NPO法人 環境防災総合政策研究機構(CeMI)

気象防災支援・研究センター

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22口ーヤル若葉105号

<http://www.npo-cemi.com/center.html>

☎ 03-3359-7971

☎ 03-3359-7987

✉ advisory@npo-cemi.com

